

進行性 / 転移性腎細胞癌の 一次治療における薬剤選択と 副作用マネジメントの考え方

開催日 2018年6月16日(土) 会場 ザ・プリンスさくらタワー東京

腎癌治療のエキスパートである6人の先生方にお集まりいただき、進行性/転移性腎細胞癌の一次治療において、薬剤選択と副作用マネジメントをテーマに討論いただいた。

- ・パゾパニブは、腎癌診療ガイドラインでMSKCC分類favorable riskあるいはIntermediate riskの淡明細胞型腎細胞癌への一次分子標的療法として推奨されている¹⁾。
- ・COMPARZ試験では、PFSに関してパゾパニブはスニチニブに対する非劣性が認められている²⁾。
- ・PISCES試験においてパゾパニブは、スニチニブに比較して患者の選好性が高いことが示されている³⁾。
- ・パゾパニブ投与の際、肝機能障害のマネジメントが治療成功の鍵となる。中止ではなく低用量で再開するという考え方もある。

1) 日本泌尿器科学会編. 腎癌診療ガイドライン2017年版, メディカルレビュー社, 2017.
2) Motzer RJ, et al. N Engl J Med 369 (8), 722-731 (2013)
3) Escudier B, et al. J Clin Oncol 32 (14), 1412-1418 (2014)



座長(発言順)

湯浅 健 先生
がん研有明病院
泌尿器科 化学療法担当部長



庭川 要 先生
静岡がんセンター
副院長兼泌尿器科部長



西村 和郎 先生
大阪国際がんセンター
泌尿器科 主任部長



ディスカッサント(発言順)

松原 伸晃 先生
国立がん研究センター東病院
乳癌・腫瘍内科



三浦 徹也 先生
兵庫県立がんセンター
泌尿器科



前嶋 愛子 先生
国立がん研究センター中央病院
泌尿器・後援腫瘍科